

---

# ラビリンス×ラビリンス

kageto

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラビリンス×ラビリンス

### 【Nコード】

N8753X

### 【作者名】

k a g e t o

### 【あらすじ】

ダンジョンに潜る冒険者の日常的な話

## 0 - 0 昔語り

突如、世界に魔王が誕生した。原因も理由もない。理不尽な存在は世界に混沌をもたらした。

最初だけは。

人は強かった。冒険者という職にいる者たちは、常に自身を鍛え世界を歩きわたってきていた彼らは、魔王の生み出したモンスターをいとも簡単に駆逐して見せたのだ。

魔王はモンスターの強化を図った。ダンジョンを作ったのだ。最初のダンジョンには大量のモンスターを放り込み、同士討ちをさせることでより強いモンスターを生み出した。

強い個体が増えてくると、世界の各地に冒険者を誘い込むダンジョンを生み出した。誘い込むエサは様々なアイテムだ。武器防具装飾具。そして繁殖数の少ない薬草や、採掘数の少ない鉱石など。

冒険者達はこぞってダンジョンに潜っていった。しかしそこには今までにない強さを誇るモンスターの群れ。人はこのときになって初めてモンスターに苦しめられ、恐怖した。強い冒険者を捕食したモンスターたちはさらに強くなり、ダンジョンの外にその活動域を広げ、人々をさらに苦しめることとなった。

モンスターの恐怖に怯える日々が長く続いた。人々は心身ともに疲弊し、魔王の征服は着実に進んでいた。

そこに一人の青年が現れた。物語の主人公のごとく、古く語られ

る英雄譚の英雄のごとく。人々の希望となり、魔を駆逐していった。

これはそんな青年の冒険譚である。

と、言うのは千年以上昔の話。青年 勇者によつて魔王は倒され、世界に残ったダンジョンに潜って冒険者の大半は生活をしている。そんな時代。 ようはするに平和だったりする。

## 1 - 1 打撃特化冒険者

ゴリツ ゴスツ グチャツ ゴリュツ

薄暗い洞窟。肉と骨を殴打する音が響く。低く鈍い音が耐えることなく、合間合間に殴打されているゴブリンの悲鳴・・・ではなく呻きがかすれる様に聞こえる。

ゴスツ ゴリツ グチャツ

「・・・しぶとい」

ゴブリンを殴打していた冒険者がボソリと呟いた。女の声。年若い。それこそ少女のような声。声のままの少女の冒険者。深い水色の長い髪を高い位置でポニーテールにし、子供と見間違っほどの低い身長を精一杯振り絞り、手にした武器をゴブリンに振り下ろしている。

しかしして、ゴブリンに止めを刺さんとするその表情は無表情。感情でもないのではというほど、表情を変えることなく淡々と殴打し続ける。

「・・・いい加減くたばれ」

再びボソリと呟く内容は、見た目に反して物騒である。

だがゴブリンもついに力尽きたらしく、呻きもかすかな反応も返

さなくなった。

「やっと終わった」

額に浮かんだ汗を軽くぬぐいながら、少女は呟いた。

「なによ。珍しく時間がかかったじゃない。アリス」

薄暗かった少女の周りに明かりが近づいてくる。灯りの魔道具に照らされながら一人の冒険者が歩いてきた。緋色の髪をショートカットにした勝気そうな女冒険者だ。腰に剣を下げ、革の胸当てを装備しているところから剣士だとわかる。

「……シーラ。ちょっと打点がずれただけ。次はちゃんとやる」

そついいながら魔道具の光に照らされた少女冒険者 アリス。そのいでたちは剣士や格闘家、武僧ではなく魔術師のそれである。冒険者向けではあるが、黒を基調としたローブに杖。杖はゴブリンの血にまみれているが、まごうことない魔術師だ。

「次のは私の獲物。交互って約束でしょ。ほらアリス、拾う物拾わないと」

女剣士 シーラに言われ、アリスはゴブリンの死骸に左手につけた装飾のない腕輪をかざした。腕輪は淡く光り、ゴブリンの死骸を黒い霧に変えて吸収した。死骸のあったところには、数枚の金貨とゴブリンの使っていた短剣が残されていた。

「……おわった」

「はいはい。それじゃあさくさくいこ〜」

二人は洞窟のさらに奥 ダンジョン3階層【岩窟】から4階層【湿地】に繋がる階段へと歩き始めた。

打撃特化冒険者 ジョブ《魔術師》アリス

これは彼女の物語である

## 1 - 2 三無し姫

「…困った」

ねぐらにしている宿屋の部屋でアリスはポツリとこぼした。

腰掛けているベッドには本が数冊転がっている。魔術書だ。

チラリとそれらに視線をやつて、手元の財布に視線を落とす。銀貨2枚と銅貨が10枚ちよつと。

宿代が銀貨で1日1枚。1週間(7日)で割引がついての銀貨5枚に銅貨が30枚。1月(30日)だとかなりまけてくれる銀貨20枚。期限は3日後。

1月契約だから18枚足りない。ちなみに今月分じゃない。先月の滞納してる分だ。

「…困った」

数分財布とにらめっこを続け、冒険の道具をまとめ始める。

5分後には迷宮に入る用意を済ませて、杖に手を伸ばす。が、一瞬迷つて、いつも使っている杖ではなく、意匠の凝らされた杖を手にする。



「…しかたない」

部屋に施錠の魔術をかけ、酒場をかねている1階に下りる。

まだ昼過ぎだというのに冒険者達が多く飲んでいる。視線をめぐらし、シーラを探す。

「あれ？アリス。また文無し？」

気づいたシーラからアリスによってくる。

「宿代3日後。残金が銀2」

「どーせまた考えもせず魔術書買ったんでしょ。まったく。殴りじゃなくて術装備ね。私も準備してくるから待ってて。15分くらいでくるから」

うえに上がっていくシーラを見届けてからカウンターテーブルに座る。

「あんまり強くは言わないけどな。金は考えて使え」

ひげ面の主人がアリスの前に水をおく。

「気をつける」

その光景をテーブル席から見ていたほかの冒険者達が、またかと苦笑いしていた。この宿屋では見慣れた光景なのだ。

「三無し姫が暴れるとなると、今日明日は迷宮に近寄らんほうがいいな」

「三無し姫？」

古参の冒険者の言葉に同じテーブルの少年冒険者が食いついた。

「ん？ああ、カウンターにいるアリスのことだ。普段は無口、無表情、容赦無しの三無しなんだが、アレくらい饒舌にしゃべってるときは文無し、容赦無し、跡形無しの三無しになるんだ。巻き添え食いたくねえから迷宮にはいかねえんだよ」

「そうなんですか……。って、アレで饒舌なんですか？」

「シーラの嬢ちゃん以外と話すのは饒舌なときだけだ。後もうひとつ覚えとけ、迷宮になれないうちは普段のアリスにも近づくな。復帰できなくなりかねん」

無口無表情でモンスターを撲殺する姿を思い出してか、近くのテーブルにいた数人の顔色が悪くなる。

「なんであの見た目でアレなんだろうなあ」

「聞いた話じゃ、魔術すげえんだろ？」

「迷宮の修復機能がなかったら、とっくに迷宮なんて残ってねえ

よ

「なんか好きらしいぜ？アレ」

「・・・なんだかなあ」

酒場全体がアリス残念話で盛り上がり始めたところにシーラが降りてきた。普段の動きやすさ重視の装備ではなく、魔術防御の高い装備だ。

「さて行きましようか。どれくらい稼ぐつもり？」

「丸2日潜って金50」

「あれ？そんだけ？いつそのこと金150いきましよう？」

「面倒」

「いーじゃない。その分また本買えるんだから」

「む・・・」

並んで迷宮に向かう二人を少年冒険者がポカンと口をあけてみていた。

「金50って金貨50枚ですよ。2日間でその枚数って少ないほうなんですか？150枚って2日間で稼げるんですか？」

「この街の迷宮だとあいつくらいのもんだ。アリスが見敵滅殺で魔術を打ちまくって、シーラがアイテムを拾ってまわるんだと。」

ま、異常なやつらだと割り切るんだな」

そう言って古参の冒険者は酒をあおった

### 1 - 3 猪系お嬢様魔剣士 砂糖風味

シーラという冒険者がいる。

燃えるような緋色の髪をショートカットにして、髪と同じ緋色の瞳は釣り目がち。胸はそこまで大きくないが、冒険で鍛え抜かれた身体は見事なバランスで男を魅了する。

片手剣を愛用し、投げナイフも使う。鎧は基本的に動きやすさ重視の軽鎧を使用し、腰のベルトには魔術触媒も下げている。

愛剣は銀剣：まおー。魔王ではなく、まおー。製作者の感性を疑うような名前だが、魔力の通りがよく、属性付与を使うシーラにはありがたい一品だ。

冒険者の中でもトップクラスの実力を持つ女傑の一人だ。

シーラという少女がいた。

湖に反射した夕日のような緋色の髪は腰までのび、地平線から覗く朝陽のような緋色の瞳は好奇心に染まり、猫のようにらんらんと輝く。控えめながらもバランスの取れた身体は、将来男を魅了するであろう兆しを感じさせる。

常に老執事を傍らに置き、興味の引いたことは即座にたずねていた。空の蒼をしたドレスを好み、若葉のような若々しい緑のアクセサリーを常に身につけていた。

活発すぎるところもあったが、ころころと変わる表情はどれも印象的で、周りの全てを虜にした。

王都の大貴族リアスクロフト家の今は亡き第二令嬢だ。

寢覚めの悪さにシーラは宿屋のベッドの上で憂鬱気のため息を吐いた。

上はタンクトップ一枚、下は下着のみでベッドの上であぐら。男が見たら一瞬で獣になるような格好でポツリともらす。

「ばかばかし・・・」

5日前にアリスの家賃強行稼ぎから戻ってから今日まで酒も飲まず、ただぶらぶらと過ごしていた。幸いにしてアリスも家賃を無事払い、宿にこもって読書中だ。後数日は迷宮には入らないだろう。

今日も今日とて屋台で買った串焼きを片手に露店を冷やかす。王都とは異なり、ここ第4迷宮都市プルセアせは露店や屋台がいたるところに目に付く。そのどれもが魅力的で、興味をそそられる。

最後の一口を口に放り込み、串の根元の店舗マークを記憶する。

（あたりだね。今度アリスを連れて行こう）

屋台の食器類にはそれぞれの店舗のマークが刻んであり、街の各所にある回収箱に食べ終わった食器を入れると、清掃業者が回収、

洗浄して店舗ごとに食器をまとめて返しにきてくれるらしい。  
視界に入った回収箱に串をいれ、甘味通りに足を向ける。

店舗から露店まで、フルーツに菓子、ジュースといった甘い物が  
全て集まった通りだ。

シーラの趣味は屋台の食べ歩きと、甘味摂取だ。生まれつきの体  
質なのか、いくら食べても太らないのをいいことに、時間があると  
ひたすらに屋台を回り甘味物を食べる。大体どれも1つあたり10  
銅貨から高くても150銅貨のものを一度に50銀貨くらいは普通  
に食べるのだ。

知り合いの女冒険者達にはよく睨まれるが、自分の特権だとばか  
りに見せびらかすのはわすれない。

ふと、ある焼き菓子屋台に目が留まる。

2人の女の子が最後の一個のお菓子を前ににらみ合っている。ど  
ちらが買つか、ということだろう。

(私達もあんなだったっけ)

自然とほころぶ口元を指でかきながら少女達に近づく。

「どうしたのお嬢ちゃん達」

しゃがんで視線を合わせて二人の顔を交互に見る。

「私が先に買っちゃったの」

「私が先だもん」

予想道理の言葉に笑いをこらえながら店員に視線を向ける。店員のおばちゃんは苦笑しながら首を振る。ホントに後ひとつしかないらしい。

ムゥと唸りながら睨み合う二人に苦笑しつつ、焼き菓子の値段を見る。30銅貨。少女達の小遣いだと決して安いとはいえない。

シリアは店員に30銅貨を渡すと、少しだけ割って口に放り込む。

「あ~~~~~」

少女達が同時に声をあげた。横取りされるとは思わなかったらしい。

「ん。おいし。さて、まだほとんど残ってるこれを半分にして、はい」

それぞれに持たせると、少女達の頭に手を置いた。

「二人で仲良く半分こ。お菓子は楽しく食べなくちゃ。ね？」

そして、少女達にそれぞれ30銅貨ずつわたす。

「これは横取りしちゃったお詫び。これで二人仲良くお菓子を買うこと」

渡されたお菓子と銅貨を見つめていた二人が、顔いっぱい笑顔になる。



「「おねーさん。ありがとー」」

「ん。半分こしたら友達だから、二人仲良くね」

「「は〜い」」

さっきまで睨み合っていたのが嘘みたい、手をつないでかけていく。途中、振り返って

「おねーさんも友達だよー」

「また一緒に食べよーねー」

笑顔の二人に手を振る。

「いつかの自分見たいかい？」

店員のおばちゃんがニヤニヤと笑っている。

「ほんとそっくり。まあ、去り際はあんなに可愛くなかったけど、私達は」

屋台に寄りかかりながら、タハハと笑う。昔を懐かしみ、恥らう笑いだ。

「にしても、おばちゃん。こっち来てたんだ。王都は？」

「最近、ちょっとね。孤児の泥棒が増えてね。あたし以外にも結構こっちに流れてきてるよ」

「そんなに？警備隊は？」

シーラの問いにおばちゃんは首を振った。

「何でも迷宮でひと悶着あったらしくてね。そっちにかりきり  
な」

「そつか……。ありがと。今度アリス連れてまた来るよ」

まってるよ。という声に手を振り、宿に向かう。

予定変更。迷宮に潜る必要がある。

早足で宿に向かいながらも、途中で菓子を買うのは忘れることは  
なかった。

「面倒にならないといけど」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8753x/>

---

ラビリンス×ラビリンス

2011年12月7日07時46分発行